

ナシ

小林 幹夫(人間社会学部人間環境学科)

Pear

KOBAYASHI Mikio

暑い日盛りのなかで、果実にかぶりつくと、シャキッとした歯ざわりとともに甘い果汁が口中にあふれる。ニホンナシは日本の夏に欠かせない果物といってよい。

1. ナシの種類と品種

ナシは、バラ科ナシ属の落葉樹である。ナシ属に含まれる基本種は20種前後と推定されているが、それは大別して次の3区に分けられている。①真正ナシ区:ホクシマメナシ、ヤマナシ、アオナシ、イワテヤマナシ、などがあり、栽培種はすべてこの区に属する。②マメナシ区:果実はダイズ大で、マメナシ、チョウセンマメナシ、マンシュウマメナシなどがある。③雑種区:真正ナシ区とマメナシ区の雑種で、小果で食用価値のあるものは少ない。真正ナシ区に属する栽培種は、ニホンナシ、セイヨウナシ、チュウゴクナシの3種に大別される。

2. ニホンナシ

英名は、Japanese pear, Sand pear。ニホンナシの起源については不明な点が多いが、現在までの有力説は、中国の長江沿岸一帯を中心として、広東省および朝鮮半島の南端、日本中部以南(日本には原生分布しないという説もある)に原生しているヤマナシを基本種として改良したというものである。中国からの渡来説もあるが、いずれにしても改良して膨大な品種群を作り上げ

たのは日本である。

弥生時代の遺跡からはニホンナシの炭化種子が出土しており、栽培の歴史は古い。『日本書紀』(720)には、持統天皇の代に「ナシなどの栽培を勧めた」とある。平安時代初期の宮中の行事や制度を記した『延喜式』(927)には、信濃や甲斐の国からナシが朝廷に献上されたという記載もある。しかし、江戸時代になるまでは品種の概念が薄く、庭先散在果樹の状態であった。

江戸時代中期になると、ニホンナシは果樹園として栽培され始め、いまの新潟県、群馬県、千葉県、神奈川県、京都府、石川県などに産地が形成された。越後(新潟県の大部分)の阿部源太夫は『梨营造育秘鑑』(1782)に棚仕立ての方法、接木、剪定、害虫、品種等について記載している。19世紀前半ごろには日本全国で、150以上の品種が存在したとされている。

江戸時代末期頃には産地も増加し、品種の変遷も盛んとなり、特に‘淡雪’というのは人気品種で、かなり広範囲な地域に栽培された。

明治維新前後には関東地方で‘独逸’‘真鍮’‘幸蔵’‘巾着’などの優良品種が発見され、それらは全国に広まり、各地の在来品種を駆逐していった。

明治時代中期以降、‘長十郎’‘二十世紀’が偶発実生として発見され、その後長期間にわたり、わが国の2大品種としてナシ産業を支えた。

大正4年に神奈川県農事試験場(現神奈川県農業総合研究所)の菊池秋雄が行った日本梨品種改良事業は画期的なもので、昭和2年に‘八雲’‘菊水’‘新高’を育成・命名し、ナシ産業の礎を築いた。ついで昭和14年に園芸試験場(現果樹研究所)で組織的に交雑育種が開始され、多くの優良品種が育成された。現在、‘幸水’‘豊水’‘二十世紀’‘新高’などが主力品種となっている。主産地は、千葉県、鳥取県、茨城県、福島県、長野県、栃木県などである。

‘長十郎’は、現神奈川県川崎市の当麻辰二郎(屋号が長十郎)のナシ園で明治28年ごろ偶発実生として発見された。‘二十世紀’の来歴には不明な点が多いが、現千葉県松戸市の松戸覚之助が明治21年にゴミ捨て場付近で実生樹を発見したとされ、明治31年に『新太白』等の名で発売されている。‘二十世紀’という名は、明治37年に種苗商の渡瀬重二郎と東京帝国大学の池田伴親により命名された。鳥取県には明治37年に北脇永治により導入されている。

なお、ナシの語源については、貝原益軒は『日本釈名』(1699)の中で、果肉が白い意味の『中白』に由来すると述べ、また、芯に近い果肉が酸っぱい意味の『中酸』、あるいは風があると果実がならないところから『風ナシ』にちなむなど諸説ある。

3. チュウゴクナシ

英名は、Chinese pear。中国でのナシの栽培は古く、漢の武帝(在位BC141～BC87)の時代にすでに10品種あったと記されている。

中国の栽培ナシは、2系統に分けられる。1つはチュウゴクコナシと呼ばれる系統で、中国の河北省、山西省、全満州、蒙古、朝鮮北部に原生分布するホクシヤマナシの純系に属する品種群で、‘北京白梨’が代表品種である。本品種群には、大果のものが少なく、開花期が特に早い。

もう1つは、一般にチュウゴクナシと呼ばれるもので、代表品種に‘鴨梨’‘慈梨’がある。この系統は、ホクシヤマナシとヤマナシとの交雑により改良されたものである。なお、ナシ研究者の間では、チュウゴクコナシとチュウゴクナシという言葉より、前者は秋子梨系、後者は白梨系という言葉が一般的に使われるようになってきている。

明治時代初期に内務省勸業寮が‘鴨梨’を、大正元年に農商務省農事試験場園芸部(現果樹研究所カンキツ部興津)が‘慈梨’を導入している。両種とも開花期が早く晩霜害を受けやすいとの理由から、わが国ではほとんど経済栽培されていない。ただ、チュウゴクコナシはわが国でも古くから栽植されており、山口県大島郡橘町に‘慈梨’に類するとされているチュウゴクコナシの古木「安下庄のシナナシ」があり、国の天然記念物に指定されていたが焼失した。

4. セイヨウナシ

セイヨウナシは、ヨーロッパ中・南部からカフカス、小アジア、イラン北部にかけて原生分布する*Pyrus communis* L.を基本種にして、一部*P. nivalis* Jacq. (アルプス、ヨーロッパ南部に分布)などとの交雑によりできた品種群である。

セイヨウナシの栽培の歴史は4,000年以上である(ド・カンドル、1883)。す

でギリシャ時代に接木繁殖が行われ、ローマ時代には35品種あったとされる。ローマ帝国の全盛期に、セイヨウナシの栽培はヨーロッパ西部、中部以北に伝播し各国に広がった。フランス、ベルギー、イギリスなどで、栽培、品種改良が盛んに行われ、特にベルギーは最も品種改良に貢献した国である。フランスは夏乾気候でセイヨウナシの栽培に適するとともに、セイヨウナシの風味はヨーロッパブドウとともに国民の嗜好に合い、栽培技術の改善や品種改良が盛んであった。たとえば、17世紀のカタログには260品種、19世紀には915品種についての記載が見られる。米国での栽培は、17世紀中ごろ以降であり、果樹園としての集団栽培は18世紀中ごろからとされている。

日本には、明治時代初期に北海道開拓史によって米国、フランスから導入され、明治10年ごろ各地域に苗木が配布された。しかし、当初は気象条件に対する適応性の知識に乏しく多くは枯死した。また、収穫後の果実追熟の必要性を知らなかったこともあり、普及するにいたらなかった。明治40年ごろから気象条件、品種の選択、剪定等の栽培管理に意を用いるようになり、少しずつ栽培は広まっていった。日本は、一般に夏期が高温・多湿であるため、枝が徒長し花芽の着生が少なく生産が安定しない。そこで、夏期に雨の少ない地域が適し、現在、栽培面積は山形県が圧倒的に多く、ついで青森県、長野県等である。主要品種としては、フランス原産の‘ラ・フランス’が60%を超え、次がイギリス原産の‘バートレット’、フランス原産の‘ル・レクチュエ’、山形県育成の‘シルバーベル’である。

5. ナシをなぜ棚で栽培するのか？

ナシは、日本では平棚を使った『棚仕立て』で栽培されているが、ヨーロッパなどでは、『立ち木仕立て』栽培されるのが一般的である。ナシは、本来10メートル近くに達する高木性の果樹であるが、日本では、収穫期が台風の襲来時期と重なるため、枝を棚に固定し強風による落果を防ぐ必要があったのである。

6. 梨についての言い伝え

ナシに関する言い伝えは多くある。日本では、ナシは『無し』に通じること

から、縁起の悪い言葉としてナシの事を『有りの実』と呼ぶことがある。『有りの実』という表現は、1812年に刊行された『円珠庵雑記』(契沖)にある。また、ナシを食べると疳の虫がわくという話や、ナシを食べると腹が冷えるため妊婦には禁じた地方もある。また、ナシの芯を食べると腫れ物ができるとか、背が伸びないという俗信もある。一方、家屋の鬼門の方向にナシの樹を植え『鬼門なし』と称したり、ナシを建材にして家を建てると『何もなし』で盗難にあわないと縁起を担ぐ話もある。

ヨーロッパでは、大晦日やクリスマスの日には少女が梨の樹をゆすると、犬のほえる方向から将来の結婚相手がやって来るとい話がある。ドイツでは、女の子が誕生すると梨の樹を植える俗習があり、豊穡、安産への願いが込められているものと思われる。また、歌舞伎役者の社会を梨園というが、これは唐の玄宗皇帝が、ナシを植えた庭園で自ら音楽を教えたという故事による。

7. ニホンナシの品種名

ニホンナシは栽培暦が古いだけに、品種名に変わったものが多い。たとえば、甘くて頬が落ちそうになり、思わず頬をたたいたところから名づけた‘頬叩’ (ほほたたき)、おいしくて巾着(財布のこと)の有り金を全部はたいて買ったことに由来する‘巾着’ (きんちやく、別名:巾着叩)、「おいしいといわれる樹はどいつだ」といったことからついた‘独逸’ (どいつ) という名がある。樹上から大きな果実が落ちると、下にいた動物が死んでしまうことから付いた‘犬殺’‘猫殺’‘婆婆殺’、熊本県天然記念物に指定されている‘婆婆ウッチャギナシ’ (ウッチャギとは方言で『つぶす』の意) などという品種もある。

引用文献

1. 小林 章(1990)文化と果物:89-94. 養賢堂
2. 星川清親(1978)栽培植物の起源と伝播:216-217. 二宮書店
3. 岸本 修ら(1992)日本のくだものと風土:79-87. 古今書院
4. 今井敬潤(2006)くだもの・やさいの文化誌:94-101. 文理閣

5. 梅谷献二・梶浦一郎(1994)果物はどうして創られたか:31-37. 筑摩書房
6. 塚谷裕一(1995)果物の文学誌:22-36. 朝日新聞社
7. 間苧谷 徹(2005)果樹園芸博物誌:55-63. 養賢堂
8. 間苧谷 徹ら(2000)果実の真実:88-199. 化学工業日報社